



中国がわかるシリーズ 32 唐宋革命（後）

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

夜の長安(唐)は、市門が閉じられ、一部の歓楽街を除けば、全体としては薄暗い街でした。これに対して、宋の開封(東の都という意味で、東京と呼ばれた。日本の東京の先駆です)は、茶館が立ち並び、講談や大道芸が市民の耳目を引く不夜城でした。

娯楽が庶民にまで浸透し、劇場は50以上を数え、名裁判官の包拯(包待制)が活躍しました(大岡越前守忠相の政談は、その多くが包拯から採られています)。現在で言えば、ニューヨークのような街であったのでしょうか。

世界最先端に行く開封には、国際ビジネスに従事するユダヤ人街もありました。春の清明節を描いた張択端の「清明上河図」や、孟元老の「東京夢華録」には、開封の夢のような繁栄振りが描かれています(もっとも、清明上河図は、開封城内ではなく郊外を描いたものらしいのですが)。

経済の活況を反映して、唐代には、30万貫程度であった銅銭の鑄造額は宋代には550万貫以上にも達しました。もっとも、女性にとっては、儒教の普及により社会での活躍の場が徐々に閉ざされていった時代でもありました。富裕階級の間で、纏足(要するに、女性は労働しなくてもいいと考えられたのです)の習慣が広がったのも宋代のことでした。